様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月　 ８ 日現在

機関番号：５６１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７００４９

研究課題名（和文）懐徳堂学派における儒教の展開に関する研究―朱子学･陽明学の折衷から融和へ―

研究課題名（英文）The study of the development of Confucism on Kaitokudo School- about the relationship between the learning of ZHU Zi and WANG Yang ming from eclecticism to unification -

研究代表者
藤居　岳人（FUJII, taketo）

阿南工業高等専門学校・創造技術工学科・教授

研究者番号：８０２２８９４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、懐徳堂学派の儒学思想を分析した。特に懐徳堂学派の儒学が朱子学と陽明学との折衷から両者の融和へと止揚されてゆく様相を分析した。中井竹山・履軒兄弟が懐徳堂で活動していた時期に至ってはじめて、懐徳堂の儒学は「実学」―現実の政治実践に資する学問―に昇華された。この「実学」としての儒学の概念を提出したことが日本近世儒学思想史上における懐徳堂学派の思想史的意義である。

研究成果の概要（英文）：In this study, I analyzed the Confucianism thought of Kaitokudo school. Especially I analyzed the aspect that Confucianism thought of Kaitokudo school grows from compromise between ZHU Xi's thought and WANG Yang ming's thought to reconciliation both of them. The Confucianism thought of Kaitokudo school sublimated to "practical thought"- the useful study for realistic political practice -. In Confucianism thought history of Japanese early modern times, it is the historical significance of Kaitokudo school confucians that they proposed the concept of " practical thought".

研究分野：人文学

キーワード：懐徳堂　中井竹山　中井履軒　朱子学

１．研究開始当初の背景

懐徳堂の儒者に関する研究は、日本近世儒教史・日本近世思想史等の分野にわたって研究されてきた。江戸時代の学者の多くは儒者で、彼らの基本的素養は漢学である。しかし、従来、彼らの漢学的教養の中心たる朱子学・陽明学研究の成果を十分に踏まえて、日本近世思想史上に位置づけようとした研究は必ずしも多くない。

従来の諸研究を尊重しつつ、中国学の研究成果を基底として、これまでの諸研究を総合する観点から研究を進める必要がある。それによって、日本近世における儒教思想受容の様相をより深く解明できると考える。本研究は、中国思想史と日本思想史との相互交流をいっそう有機的に図るための一つの契機となる。

研究代表者の藤居は、懐徳堂最盛期の儒者中井竹山・中井履軒兄弟を中心とした経学思想・経世思想を取り上げて、①江戸期儒者としての懐徳堂学派の立場の分析②懐徳堂の経学思想の分析③懐徳堂の経世思想の分析、の三点の柱を中心に懐徳堂学派の思想史的意義を明らかにすべく検討を続けてきた。中井竹山・履軒兄弟は基本的に朱子学の立場であり、その立場から理想的人格者であるのみならず、理想的為政者として教育を通して達成されるべき「聖人」を目標として、「実学」―現実の政治実践に資する学問―を志向する教育を進めた。

ただ、江戸時代の儒教は朱子学のみならず陽明学の影響力も強く、実際、懐徳堂草創期の学主・三宅石庵には両者を折衷する傾向があった。竹山・履軒の師である五井蘭洲の頃から懐徳堂は朱子学中心の学風になったとされるけれども、その儒教の低奏音として陽明学の影響が続いていた。だからこそ経学思想と経世思想とが絶妙に融和した懐徳堂独自の儒教が形成されたのではないかと考えるに至った。このように懐徳堂の儒教をとらえることで、幕末に続く「実学」の系譜の展開に懐徳堂の儒教が重要な役割を果たしたことを明らかにできると考えた。

２．研究の目的

本研究は、江戸時代の大坂に存した学問所・懐徳堂の儒者の思想が朱子学と陽明学との折衷から両者の融和へと止揚されてゆく様相を分析する。懐徳堂最盛期の儒者である中井竹山・中井履軒兄弟は基本的に朱子学の立場だけれども、その立場の基底に、朱子学とならぶ重要な要素たる陽明学の影響があった。この両者が融和されたところに懐徳堂独自の儒教が成立し、幕末に続く「実学」―現実の政治実践に資する学問―の系譜の展開に重要な役割を果たしたことを明らかする。それによって、日本近世儒教思想史上における懐徳堂学派の思想史的位置づけを再構築することを本研究の目的とする。

３．研究の方法

（１）第一は、中井履軒の経学研究における陽明学の影響の分析である。履軒の経学研究は基本的に朱子学的立場に基づいているが、その注解は陽明学の影響が強い明代儒者の注釈を多く参照している。履軒の経学研究において、朱子学的要素と陽明学的要素とが融和している様相を解明する。

（２）第二は、中井竹山の漢詩文を題材とした懐徳堂の「実学」―現実の政治実践に資する学問―の展開の様相を分析することである。屈原の『離騒』に象徴されるように、元来、漢詩文は中国士大夫にとってその政治的理想を詠むという性格も有している。竹山には漢詩文集『奠陰集』があり、その内容を精査することで彼の経世思想の梗概を解明する。

（３）第三は、中井竹山と播州龍野藩の儒者との交流の様相を分析することである。元来、竹山の「社倉私議」は龍野藩の経済対策の一環として提議されたものであり、実際に懐徳堂の儒教が龍野藩の「実学」として具体的政策に影響を与えた様相を解明する。

４．研究成果

平成 26 年度から平成 28 年度にわたる期間において得られた本研究の研究成果は以下の通りである。

（１）第一に、江戸時代における儒者の性格の変化についての分析である。中井竹山・履軒兄弟が活躍していた時期は、寛政改革を契機とする儒学の位置づけの変革期でもあった。寛政改革期以前の儒者は、中国の士大夫に比べればその社会的地位は比べるまでもなく低いものだった。民間にあっては庶民を対象として道徳意識の向上に資する教育に携わることが主な任務であり、幕府や諸藩にあっても同様に将軍や藩主あるいは家臣らの道徳意識の向上がその主な任務だった。儒者は「修己」を基底にしつつ「治人」に携わるというあり方がその本来的あり方であり、政治に参画してはじめてその本来の目的を達成できる。したがって、政治に参画する状況にない儒者は、その本来的あり方から逸脱していたと言わざるを得なかった。

寛政改革を機として、武士の間に本格的な儒学的知識が徐々に浸透することになり、その本格的知識を有する武士が藩政あるいは幕政に直接的に主体的に参画する機会がようやく増加していった。すなわち、寛政改革以後、日本においてもようやく儒学がその本来の意味での儒学に、儒者がその本来の意味での儒者に、そのあり方が変容していったと言える。その意味において、寛政改革は儒学と儒者とがその本来的あり方に変容してゆく契機として重要な歴史的位置にあり、日本近世儒学思想史上における一大画期とも言

えることを明らかにした。

（２）第二に、中井竹山・履軒兄弟の時期における懐徳堂朱子学の性格の分析である。具体的には竹山・履軒兄弟を取り巻く儒者たちが有していた朱子学の性格を懐徳堂朱子学の性格と比較することによって分析を進めた。まず、竹山・履軒兄弟の師たる五井蘭洲の朱子学である。蘭洲は、それまで「鵺学問」と呼ばれて朱子学や陽明学などを折衷した立場だった懐徳堂の儒学を朱子学一尊にした人物である。なぜ蘭洲は朱子学を尊重するようになったのか。それは朱子学が性善説を堅持していた立場だったことと聖人の道への着実な方法を提示していたこととの二つの特徴を有していたからだった。この蘭洲の朱子学と頼春水に「其の学　程朱を信じて純ならざるを恨みと為す」と評された竹山・履軒兄弟の朱子学とはその性格を異にする。しかし、ともに朱子学的立場は共有しており、懐徳堂最盛期の儒学の大きな方向性を定めた点において、蘭洲の果たした役割は大きいと言える。その蘭洲の朱子学の具体的性格を解明した。

次に尾藤二洲の朱子学である。二洲は、頼春水・古賀精里らとともに近世後期朱子学派の中心的人物である。彼ら近世後期朱子学派の儒者と懐徳堂学派の儒者とを比較すれば、確かに両者ともに具体的実践の重要性を認識しているが、前者は儒者の具体的実践の中心的内容を道徳教育と考えており、政治に直接的に携わるわけではなかった。それに対して、後者は儒者の職務は、本来、政治の直接的担当者だという気概をもっていた。竹山が松平定信に『草茅危言』を提出したことがその気概の表われである。つまり、懐徳堂学派の方が、政治的実践を重んじる本来の朱子学の性格により近いと言える。近世後期朱子学派は、みずからの朱子学を「純」、懐徳堂の朱子学を「純ならず」としているが、それは理気説を堅持する観点から見ればそうなのであって、政治的実践を重視する観点から見れば、実は懐徳堂の朱子学の方が「純」だと言えることを明らかにした。

（３）第三に、中井履軒の経学研究を通した実学思想の分析である。履軒の『論語逢原』に見える『論語集注』批判の様相から、彼が宋学の性論あるいは理気説という完結的理論を批判していることが明らかになった。その批判は、運命という如何ともしがたい概念の方が、経世面の能力も十分に有するという自負をもちながらその能力を発揮する機会のない履軒自身の境遇も含んだ理不尽な現実を説明するにふさわしいと考えていたからだった。これは、一見、履軒が運命の前に屈服しているように見えるけれども、そうではなく、そこには現実をよく見ようという履軒の基本姿勢が反映している。つまり、現実をよく見ることによって、履軒は先のわからない運命に対してポジティブにみずからの人生を賭けようとしていたのである。そこに理不尽で先の見えない現実に対して前向きに立ち向かい、政治を通して、自分にも他人にも良い道を実現しようとする彼の「実学」的態度が看取できる。

ここで言う「実学」とは、「修己」を基底としつつ社会全体に対する責任感をもとにした現実の政治実践に資する「治人」のための学問のことであり、朱子学や陽明学、あるいは折衷学と後世に分類される枠組みを超えて、儒者たちは徐々にみずからの立場に拠りつつそれぞれの方法で現実の政治に参画する道を模索するようになっていた。その意味でそれぞれの学問は現実の政治実践に活かされる「実学」になっていたと言ってよい。履軒にあってもこのような「実学」志向を看取できることを解明した。

（４）第四に、中井竹山の実学思想の分析である。竹山は「実学」こそ儒者のめざすべき学問だという立場であり、彼の実学思想は佐藤一斎や山田方谷、帆足万里ら幕末期の儒者たちの実学思想に影響を与えていた。元来、中井竹山と播州龍野藩の儒者との交流の様相を分析するつもりだったが、竹山や履軒が活躍していた時期の懐徳堂が、江戸時代後期の昌平黌で活躍した佐藤一斎や西国諸藩の儒者らとさまざまな経路でつながっていたことがわかり、まず、その様相を検討した。その結果、それぞれ実学思想を基底とした共通の基盤が存することが明らかになり、懐徳堂儒者と幕末期儒者との実学思想そのものには本質的相違がないことが解明された。

ただ、竹山のときには松平定信による寛政改革が進行しつつあり、竹山自身も『草茅危言』を定信に献上することで学校における教授職を通して政治に参画しようとしていたとはいえ、儒者が本格的に政治参画を果たすほどには機は熟していなかった。それが幕末に近づいた一斎や方谷・端山・万里の時期になれば、日本全体の政情が急を告げてきていたことや財政を中心とした藩運営の問題点が露わになってきていたこと、あるいは「儒学の大衆化」によって儒学的知識を身につけた中下層の武士や庶民上がりの儒者が藩や幕府の政治に直接的に参画する機会が増えてきたこと等によって状況が変化してきた。つまり、両者の立場の相違は、本来的儒者として力をふるうことのできる機が熟していたかどうかという周囲の状況の相違のみだった。

したがって、幕末の学術界における実学思想の結節点に位置する一斎の「実学」は竹山に代表される懐徳堂学派の「実学」の系譜に連なると考えることができる。それによって、懐徳堂学派を日本近世思想史上に位置づけることができ、懐徳堂学派が寛政改革期から幕末期の学術界に大きな影響を与えていたと言えることを明らかにした。

懐徳堂初代学主だった三宅石庵の学問は、上述のように「鵺学問」と呼ばれて批判されていた。中井竹山・履軒兄弟のときの懐徳堂に至ってはじめて、朱子学・陽明学の枠組みにとらわれない本来の儒学、すなわち、「実学」に昇華された。それがすなわち懐徳堂の儒学思想が朱子学・陽明学の折衷から融和へと止揚されてゆく具体的様相だと言える。そこに懐徳堂独自の儒学が成立し、幕末に続く「実学」の系譜の展開に重要な役割を果たしたということが言える。以上の検討によって、日本近世儒学思想史上において懐徳堂学派が重要な思想史的位置を占めることを解明することができた。

以上、本科学研究費補助金を得た三年間の研究期間で得られた研究成果である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　４件）

① 藤居岳人、中井竹山と実学と、懐徳、査読有、83 号、2015、pp.19－30
② 藤居岳人、中井履軒にとっての「命」－『論語逢原』の程注批判から－、中国研究集刊、査読有、60 号、2015、pp.160－177
③ 藤居岳人、五井蘭洲と朱子学と、懐徳堂研究、査読有、7 号、2016、pp.19－40
④ 藤居岳人、尾藤二洲の朱子学と懐徳堂の朱子学と、懐徳堂研究、査読有、8 号、2017、pp.19－37

〔学会発表〕（計　２件）

① 藤居岳人、懐徳堂儒者の実学思想、第 6 回東アジア文化交渉学会、2014/5/9、中国・復旦大学
② 藤居岳人、尾藤二洲の朱子学と懐徳堂の朱子学と、第 23 回懐徳堂研究会、2016/3/29、大阪大学

〔図書〕（計　１件）

① 湯浅邦弘・藤居岳人他、大阪大学出版会、増補改訂版　懐徳堂事典、2016、337、（共著）

６．研究組織

(1)研究代表者

藤居　岳人（FUJII, Taketo）
阿南工業高等専門学校・一般教科・教授
研究者番号：８０２２８９４９